角川文庫
—3842—

夕映えの殺意

森村誠一

角川書店

昭和五十二年二月十五日　初版発行
昭和五十二年七月二十日　四版発行

定価は、カバーに明記してあります

角川文庫

夕映えの殺意

著作者　森村誠一
発行者　角川春樹
印刷者　中央精版印刷
東京都文京区関口一丁目四ノ八

発行所　東京都千代田区富士見二ノ十三
郵一〇二振東京③一九五二〇八
株式会社角川書店
電話東京(265)三二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan　大谷製本
0193-136524-0946(0)

夕映えの殺意

森村誠一

角川文庫
3842

目次

理想の虐殺　五
悪夢の生存者　三三
廃れた故郷　七七
刈り残した凶草　一〇二
暗黒街の陥穽　一三一
囮捜査人　一九六
密閉された入浴者　二三六
不燃の転落　二五四
落下した密室　二八四
最後の接点　二九七
落日の怨念　三一四
解説　武蔵野次郎　三四六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

理想の虐殺

1

ウイリアム・B・ハサウェイ大尉は、いやな予感が当たったとおもった。九月×日、百九機よりなる「超空の要塞」B29の編隊は、満州の鞍山製鉄所の爆撃に向かって中国奥地の基地成都を飛び立った。

ところが離陸直後にたちまち三機が墜落、三十数名の搭乗員が死亡、三名が重傷を負うという事故が発生し、二十八機がエンジン不調やその他の故障で途中から引き返してしまった。

このため攻撃目標上空に達したのは、七十八機である。この事故によって、目標上空に達した機も、いちじるしく戦意を削がれていた。

鞍山上空は、薄曇りで視界が悪く爆撃に適した状態とは言えなかった。B29の群は、新たに採用した各十二機の編隊をもって、目標物を目視で捉えるために、千五百―二千メートルの低空で爆撃コースに入って行った。

だが地上を煙霧が被い、目標を明確に視認できない。ほとんど手探りで先頭機から投弾をはじ

めたが、爆発による煙幕が地上を被い、ますます攻撃目標を隠してしまった。

地上からの対空砲火は凄じかった。命からがら高空へ逃げ上がろうとしたところを、日本戦闘機の迎撃を受けた。この迎撃は、ハサウェイが何度も行なった出撃の中で、もっとも激しいものだった。

爆撃の戦果を確認する間もなく、B29の編隊は算を乱して逃げまわった。上昇限度九千七百メートル、最高時速は日本の誇る『零戦』より速い六百四十キロ、十二・七ミリ機銃十、二十ミリ機関砲一の武装に奢り、さらにほとんど反撃のなかった日本側にすっかり油断増長していたところを、衝かれた感じである。

ハサウェイを機長とするB29『ローズマリイ』は、成都に基地をおく、第二十爆撃兵団に所属しており、昭和十九年四月下旬より中国戦線に投入されていた。

機長の下に、副操縦士、飛行技術士、航測士、爆撃士、整備士、銃手、無線手、レーダー手など、十一名の搭乗員で、うち将校五名、下士官六名の編成チームになっている。

この日、日本機はまったく新しい戦法で攻撃を仕掛けて来た。B29機群の上空に翔け上がった日本戦闘機は、B29の進路の上に奇妙なものをばら撒いた。待避する間もなく、それらの物体は、B29の頭上で次々に炸裂した。

これが日本軍が新たに開発したB29要撃用の新型爆弾で、時限装置によって、B29のコース上で爆発するようになっていた。

まるで無人の野を行くようなこれまでの攻撃に、敵を甘く見た彼らは命中精度をよくするために、悠々と高度を下げて行ったところを、予想もしなかった激しい対空砲火を浴びせられた。ともかく手探りで搭載爆弾を投下して、待避コースへ入ったとき、上空に待ち構えていた日本機から新型爆弾の洗礼を受けて、完全に動転してしまった。

そこへ、止めを刺すべく、日本機が斬り込んで来たのである。

B29編隊は、反撃態勢を取る前に、名にしおう『隼』のためにめちゃめちゃに叩かれた。

各機とも反撃どころか、逃げるのに精いっぱいであった。正常な状態で相対すれば、武装も性能も比較にならないほど優秀なB29が、このときの出撃で六機も食われてしまったのだから、そのうろたえぶりと、救い難い惨敗のほどがわかる。

第三編隊の一番機をつとめていたハサウェイ機は、搭載していたM64五百ポンド爆弾二十五、M76五百ポンド焼夷爆弾十五個を、煙幕の上から目視によって投弾し、待避コースに入ったとき、前を行く第二編隊の三番機と六番機が新型爆弾を浴びせられて、火を吹いた。

対空砲火の有効圏内から離脱したところで、いきなり火だるまとなった二機に、僚機は一瞬なにが起きたのかわからなかった。最初は日本機がお得意の体当たりを仕掛けて来たとおもった者も多い。つづいて第二編隊の一番機がグラリと傾き、みるみる編隊から離脱した。

これが日本軍の新型爆弾とわかるや、爆撃隊はたちまち恐慌状態に陥った。爆弾の威力そのものよりも、いきなり頭上から浴びせかけられる新型爆弾の心理的ショックのほうが大きかった。

後続編隊はまだ爆撃位置に入らないうちに、投弾してしまう。投弾しているのではなく、恐怖に駆られて爆弾を捨てているのである。

編隊は乱れ、各機勝手な動きをはじめていた。攻撃隊長が必死に制止していたが、いったん臆病風に吹かれた各機の足並みは元へ戻らなかった。

ハサウェイは、第二編隊の頭上にばら撒かれた正体不明の物体が、〝危険物〟であることをいち早く予感して、第三編隊のコースを曲げさせた。

そこへ右上方から隼戦闘機の編隊が攻撃をかけてきた。こちらも負けじと応射する。色彩豊かな彼我機銃弾の曳痕が空中に交叉する。この攻撃によって、ローズマリイは、操縦室と、右銃座に被弾した。無線手のジョン・クロスレイが胸を射抜かれて即死した。右銃座も沈黙した。

ハサウェイは、機を上昇させて隼の攻撃を振り切ろうとした。高度五千まで上げたところで、今度は左下方から、隼数機の攻撃を受けた。こちらの銃座からも激しく応射している。

突然、左端の第一エンジンから火を発した。機体が大きく左に傾いて振動した。

「ナンバーワンエンジン、ファイアー！」

サム・アーチャー飛行技術士が絶叫した。

「ナンバーワンエンジン、シャットダウン」

トベイ・ゴッドウィン副操縦士がすかさず第一エンジンのレバーを引いてエンジンを切った。

同時にハサウェイが燃料を遮断して、消火レバーを倒す。第一エンジンの炎が消えて、白煙を後

部に吹き流した。

火災は消し止めたが、ハサウェイは操縦に困難を感じていた。

「左右のコントロールがきかないぞ」

自分の手の一部のように動いていた操縦桿が重い。全身の力をこめて、操縦桿を支えても、機体は左へ左へと傾いていく。

「機長、油圧計が異常に下がっています」

アーチャー飛行技術士が愕然として叫んだ。針が千二百—千四百の間をビリビリと震えている。正常圧力の半分以下である。

いまの隼の攻撃によって第一エンジン付近の油圧パイプを破られたのである。油圧は人間の血圧のようなもので、油圧系統を破壊されると、あたかも人体が脳出血をおこしたように、機体のコントロールを失ってしまう。

補助翼、方向舵、下げ翼、車輪の上下など機体の重要部分をすべて油圧装置が動かしている。

「機長、これでは旋回できません」

ゴッドウィンが悲愴な声で訴えた。基地に帰投するためには、百八十度方向転回しなければならない。転回のためには機体を三十度以上傾ける。だが転回した後に機体の傾きを回復できない場合は、機のコントロールを失ってしまう。またかりにコントロールを取り戻せたとしても、この傷ついた機体で中国奥地にある成都の基地まで辿り着ける可能性は、まったくない。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

まだ損害程度の確認はしていないが、後部銃座もひどい目にあっているにちがいない。

さいわい、日本機の執拗な追撃は振り切ったようである。僚機はどうなったかわからない。ローズマリイは、いつの間にか編隊から離れて、敵の領空にたった一機で取り残されていた。通信装置も破壊されていて、通信を設定できない。

――どうします？――

ゴッドウィンとアーチャーが、ハサウェイの顔に視線を寄せた。こうしている間も、機体の振動は、ますます激しく、操縦桿は重くなる一方であった。

「いちばん近いソビエット領空まで、どのくらいある？」

ハサウェイは、アル・ジョナサン航測士に聞いた。だが、すでに現在の機位も失われていた。完全な盲飛行である。

「地形から判断して瀋陽東方の山地とおもわれます」

ジョナサンが地上を目視しながら答えた。眼下には荒涼とした山地が、力尽きた獲物が落ちて来るのを牙を剝き出して待ちかまえている獣のようにひしめき合っている。

「シート、故障銃器、不用積載物をすべて捨てさせろ」

ハサウェイは命令した。

「どうするつもりですか？」

ゴッドウィンが聞いた。

「このまま進路を東北に取り、ソ連領に向かう」
「ソ連へ？」
操縦室に居合わせた三人の部下は、表情を変えた。まだソビエットは対日参戦していなかったが、その態度に曖昧なところがあり、中立国として信頼できない部分が大いにあったからである。
「たとえ無事に転回できても、この状態では味方の勢力下にある地域まで辿り着けない。ソ連領の方が近い。中立国だから、あまりひどいことはしないだろう。帰投コースを向かえば必ず捕虜になる。一か八か、ソ連へ行ってみよう」
「しかし、ソ連まで保ちそうにありません」
ゴッドウィンが口をはさんだ。
「行けるところまで行ってみるんだ」
それが決定であった。後部搭乗員室から報告がきた。右銃座は敵の機銃によって破壊され、銃手のラルフ・マイヤーが腹部を射たれて重傷、さらに後部銃手のハンク・ウォルソンが軽傷ということである。
「マイヤーは保ちそうか？」
「とてもだめでしょう。もう意識がありません」
損傷の報告をしてきた爆撃手のノリス・フェルトンが言った。ハサウェイは眉を曇らせて、頭を左右に何度か振った。いまは、どうすることもできなかった。この傷ついた機を操って、ソ連

領まで運んで行くことに、彼の全能力を集中しなければならない。それがハサウェイに課せられた義務であった。

機は辛うじて高度六千メートル、時速三百五十キロを維持している。高々度飛行のために気密室になっているB29の機内は、被弾して圧力が抜けかけていたが、エンジン出力を高めることによって、そこからの空気流入を増やし、どうにか圧力を保たせている。

しかしこれ以上、高度を上げると、圧力と空気流入のバランスが崩れてしまう。

ハサウェイはこのまま東に向かい、ウラジオストックに行くつもりだった。果たしてウラジオにB29が着陸できるような滑走路があるかどうかわからなかったが、ソ連唯一の不凍港として、ハサウェイも名前を知っているくらいだから、空港はあるだろうとおもった。

下方の視野は、行くほどに荒涼としてきた。まことに地の果てへ向かっているような感じであった。

「おい、ゴッドウィン、手伝ってくれ」

操縦桿はもはやハサウェイ一人では動かせないほどに重くなっていた。ハサウェイの手にゴッドウィンが手を添えて、四本の腕によって辛うじて支えられている。

不幸中の幸いに残った三発のエンジンが異状なく動いている。左に生き残った第二エンジンを最大限にパワーアップし、右の第三、第四エンジンを最小に絞って、バランスを取っているのだが、左翼はまるで地獄の引力にわしづかみにされたかのように左下方へ引きずりこまれていく。

機体がひっくり返りそうになる直前で、アーチャーが非常用油圧をかけて、バランスを危うく取り戻す。しかしこの調子で非常用油圧を使っていけば、たちまち費い切ってしまう。

「機長、高度が下がっています」

ジョナサンが悲鳴のような声を上げた。ハサウェイは、言われなくとも気がついていた。これまで維持していた高度が、じりじりと下がっていた。地表が次第に迫ってきている。エンジンの推力が弱っているのである。高度が下がったので、圧力の心配はなくなったが、このまま推力が衰えたところで、機体のバランスを失えば、もはやそれまでであった。

「とてもソ連領まで保ちそうもありません」

アーチャーが言った。度重なる非常用油圧の使用で、その余力が底をつきかけていた。フェルトンが、マイヤーの死を連絡してきた。

「どうやら、死ぬのが少し早いか遅いかの差になりそうだな」

ジョナサンがひとり言のようにつぶやいた。満身創痍のローズマリイは、パイロットの必死の努力を嘲笑うように地表へ近づいて行く。

茶褐色の荒地と、突兀たる岩山がせり上がってくる。それらのどの一角を拡大して見ても、生につながるような場所は、見当たらないようであった。

「機銃を全部捨てろ」

ハサウェイは命令した。

「しかし、機銃を捨てては……」
「わかってる。しかしこのままでは敵に食われる前に墜ちてしまう。不時着地点を見つけるまでなんとか保たすんだ」
ハサウェイも不時着を覚悟した。ローズマリイのすべての武装が、投げ捨てられた。しかし機体の下降は食い止められない。
「もう捨てるものはないか」
「ありません」
「マイヤーとクロスレイの死体を捨てろ」
「機長！」
部下が愕然とした視線をハサウェイの面に集めた。
「止むを得ないんだ。おれには生きている部下の生命を守る義務がある。マイヤーもクロスレイも許してくれるだろう」
「二人を捨てても、どうにもなりません」
「とにかく最善を尽さねばならん」
「私にはできません」
ゴッドウィン、ジョナサン、アーチャーの三人が言った。
「捨てるんだ。命令だ。おまえたちがやらなければ、おれがやる。三人で操縦桿を握ってい

ろ」

「わかりました。私が捨ててきます」

ジョナサンが、持ち場から立ち上がった。〝生きている部下〟を救うために最大限の努力をしようとしているハサウェイの姿勢が、わかったのである。

二個の死体が機外に投下された。それは凄絶な〝空葬〟であった。

――許してくれ。おれたちもすぐ後から行く――

ハサウェイは、胸の中で部下の許しを乞うた。

「全員、マイヤーとクロスレイのために黙禱」

たちまち二点の黒点となって、機の後下方へ遠ざかって行く二人の死体に向かって束の間の告別が為された。彼らの犠牲によって、機は多少の揚力を取り戻したかのように感じられた。

「手の空いている者に地上を注視させろ」

ハサウェイは、二人の部下によって贖った揚力を最大限に利用するのが、せめてもの彼らに対する償いであるとおもった。だが地上はまったく拒否的な様相をしめしていた。緑のない茶褐色の起伏が、視野のかぎりその隆起と亀裂を反復している。

時折り集落が山峡や盆地に見えるが、それも自然を開拓したり、自然と融和したものではなく、拒絶的な自然の片隅にその目を盗んでようやくしがみついているようであった。人間から遊離した、まったく親しみのない荒涼たる自然が、行けども、行けどもつづいている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com